

眉村卓『わがセクソイド』の メモ

takaidos

眉村卓。
1969年発刊。

読んでいて連想した作品。

ジョージ・オーウェル『1984』(1949)。

レイ・ブラッドベリ『華氏451』(1966)。

PKディック『アンドロイドは電気羊の夢を見るか』は1968年発刊
で『ブレードランナー』は1977年。

映画『タクシードライバー』(1976)。

それぞれのテーマとアイデアの違いは？

『アンドロイド…』はスペックが人間に追いついて来たアンドロイド
の人権、差別について考察。

本書は形成されつつある、コンピュータ社会、物質主義社会に対し
て個を失って行く人間に対する警鐘。

内容は機械生命(人工生命)の仕組みやロジック、成長に焦点はなく
、あくまで社会に取り込まれまいとする人間、己の欲望のコントロ
ールが出来ない人間、そして最後には過激な行動に走ってしまう人
間に焦点が当たっている。

思春期を引きずったまま大人になった未発達な人間を悲劇のヒーロ
ーのように扱っていて、対局は社会のシステムに妥協した、薄汚い
人物を登場させているが、未来のほかの一般大衆を描き切れてい
ない。

設定された社会背景の中で、登場人物たちの両親とか一般家庭とか
サラリーマンの生活とかは描かれていないで、通勤途中のラッシュ
くらいにしか集約されていない。

部屋から出した機械生命に社会のことをいろいろ勉強させたら、ど
う成長するのか、どこまでが限界なのか、といったことも大きなテ
ーマとなったはず。

戦前に生まれて、戦後、安保、左翼活動などを見てきた著者の社会
の変遷や疑問について書かれている部分もあるが、疑問が両極端で
一体どの読者層に訴えているのか。

人間が効率を目指して築いて来た社会システムに従っている人間は
薄汚れているの？

★★

プロローグ
朝
立場
重装機動隊
出会い
転機
強奪
破局
夜
エピローグ

解説/山本明

<登場人物>

浅野年夫:25,6歳。ベストセラーズ製作会社。サラリーマン。学生時代は優秀で文化的攻撃者。理想的で生真面目。

水原英一:年夫の高校の同級生。警察畑出世コース。重装機動隊。現実と折合いを付けて出世。

浦島:職場のグループチーフ。

森下正造:50歳に近い。年夫の職場で同じグループ。身寄りなし。溝口のことを好き。

溝口かずみ:去年会社の研修を終えた。婦人団体。セクソイド反対運動。過激思想。

小川充子:高校時代の憧れの女生徒。国家資格・家庭管理士。婦人団体。欲望の塊。

ユカリ:年夫が馴染みのセクソイド。

<あらすじ>

四月の夜明け。

マグネット列車の建設が進んでいた。

通勤アワーにはビジネスマンたちはコンベアロードを使っていた。

年夫は混雑するコンベアロードを避けて白タクを拾う。

途中で輸送中に？道に落ちたセクソイドが男を捕まえているのを目撃する。

会社ではコンピュータ(AI?)との協働作業でベストセラー本を作る仕事をする。

溝口かずみに、セクソイド反対運動のデモに誘われる。

高校時代の同級生・水原英一に同窓会に呼ばれて、むかし憧れだった小川充子に再会する。

水原の差し金で充子は年夫を誘惑するが年夫は逃げる。

翌日、セクソイド・センター前で4万から4万5千人のデモが行われ、水原は重装機動隊の隊長として鎮圧に赴く。

デモは120名の死者を出し溝口かずみも逮捕された。

同窓会。

年夫は森下に頼まれたように、溝口の解放を依頼するが、彼女はデモのリーダー格だった。

酔った男たちは池袋のセクソイド・センター『キャッスル』に行く。

そこで年夫は、セクソイド・ロボットのゆかりと会う。

年夫はたびたびゆかりに会いに行くようになる。

会社では森下が溝口の解職に錯乱する。

そこへ溝口が警備員に伴われて最後の挨拶に来るが、缶の爆弾を開けようとして警備員に止められ、服毒自殺してしまう。

年夫は溝口が資金集めのために森下に抱かれていたことも知る。

年夫はその日もゆかりに会いに行く。

そこへ水原がやって来て「セクソイドは罫で幻影だ。その中で人として未発達なまま終わってもいいのか!？」という。

そして「ここもじきに再調整が入る」という。

年夫はゆかりに再調整とはなんだ、と訊く。

再調整とは、より顧客受けがいいようにセクソイドの記憶を消し性格変更もする作業であると知る。

再調整の日。

キャッスルの裏口でエアー・カーに搬入されたユカリを強奪した年夫はレンタカーで上野駅に向かい、タクシーに乗り換え東京駅に向かう。

電車で大阪のスラム街を目指すためだった。

年夫は仕事帰りに、大阪に来ていた充子に見つかってしまう。

充子はセクソイドを見せなければ警察に連絡するという。

仕方なく充子をスラム街のアパートに連れて行くが、充子はユカリの裸を見ようと年夫と揉み合っているうちに窓から転落死してしまう。

駆け付けた警察に年夫はレーザーガンを放つ。

18名の警官が犠牲になり、大阪に転任していた水原の説得も虚しく、警官隊による総攻撃の時間が迫る。

年夫はユカリを逃がそうとするが、ユカリはこの1ヶ月で自分は今もう年夫専用になってしまったのでキャッスルに戻れない、自分も死ぬという。

<メモ>

☒☒抜粋

「たいていの連中は現象だけ見てまず評価をくだし、それから感情が動かされると、たちまち考え方を逆にしてしまう」

「物質的に豊かになればなるほど、人間の心は貧しくなっていく。何を見ても新鮮な驚きを覚えず、物質的な欲望だけが際限もなく大きくなってゆくのだ。考えることも感動することもなく、自分をねじ曲げてでも、世の中に適応して行こうという連中でいっぱいなのだ。

そのせいもあって、ひとりひとりの暮らしの格差もひろがり、優勝劣敗が当然のルールとして受け入れられようとしているのだった。世論コントロール技術は一年ごとに巧妙になり、反逆を叫ぶ集団、いや、年夫のようにただひとり、周囲のありかたを疑い、自分に忠実であろうとする人間さえ、不適応者として片付けられがちなのだった。」

「自己を確立していない夢想家はもちろん、現実というものに不満を抱き被害妄想に陥っている人間にはきわめて危険だ。かれらはたやすく幻影の女のとりこになってしまう。」

水原→年夫。

「もう一度考えろ。幻想から脱出するんだ。きみはその架空世界の中で人間として未発達のままに終わるかも知れないんだ」

ベストセラーズ製作の例。

AとBとの愛、Aに近いCの干渉、愛の終わり。Aの誤解。Aの復讐。Bの破滅、事実の暴露。AのCへの復讐。時代は不定。舞台はなるべく広範囲。

☒☒ガジェット

立体カラーテレビ(タイムスイッチ付き)

磁気整理棚

マグネット列車:リニアモーターカー?

エアシュート:高級住宅に付いている。

コンベアロード:歩行者用ベルトコンベア。動く歩道。通勤に便利。

セクソイド:ロボット売春婦。

セクソイド・センター:遊郭。

家庭用ファクシミリ:

クレジット・カード:

映話:テレビ電話。勤務中は録画もしておける。

コンピューターと人間協働作業による書籍作成:

公共サロン:コンピューター系会社による信用経営。有料施設。

デモを暴徒化させる技術:科学技術と集団指揮の専門家によって可能。

自動掃除機

自動料理機

コンピューターに統制された職場

ヘリコプター・タクシー

東海道メガロポリス

エア・カー:

レーザーガン

石綿の天井。

解説より。

1970年代はSFが市民権を得た時代。

それまでは宇宙を舞台にした活劇と、難しい理論をペダンティックに語るもの中心だった。

1950年代は左翼運動、左翼思想が盛んだった。

太宰のような、恋と革命ももてはやされた時代で、火炎瓶闘争、農村工作隊、政党の地区委員として半地下活動をし、六全協もあった。

。